

【ねがいましては】

令和7年5月3日

KYOWA SCHOOL

第418号

「素敵な学校時代は可能か」

ある日の読売新聞です。『不登校 学習指導を柔軟化』と題し、文部科学省はこの4月、個別にカリキュラムを作成しながら、急増する不登校の子どもの学習環境を充実させるべく「特例制度」を提案したそうです。具体的には児童生徒の状態に応じて授業時間を削減したり、下の学年の内容を教えたりなど、カリキュラムを柔軟に編成すること。

ここで数字はウソをつかないのでデータを紹介します。

◆不登校人数

2006年（平成18年）		2023年（令和5年）		増加率
小学校→ 23,825人	→	130,370人	→	547%
中学校→ 103,069人	→	216,112人	→	210%
高校→ 57,544人	→	68,770人	→	120%

小学校においては5倍以上の増加であり、では小学生（児童）数の推移といえば、1958年（昭和33年）→1,349万人をピークに2024年（令和6年）には594万人 → 56%も減少、ピーク時の半分以下になっています。

小学生の人口は急減しながら不登校の割合は5倍以上に増えているという、緊急事態をすでに大きく逸脱している状態だと感じます。（会社であれば売り上げは急減、経費は5倍と同じ？）

そこで、この4月に文科省は児童生徒一人ひとりにあわせたカリキュラム作りを認めたようです。「特例」です。学校へ行けなくなった子だけに許される「特例」……。ではぎりぎり行けている子はどうか？

これで不登校に苦しむ（いや、ひょっとすると学校へ行かないことで精神的に安定している子どももいるはず）子どものところが救われるのか疑問に感じました。それともあくまでも学力主義なのか……。

最近読んだ本の中に「制度疲労」という語彙が私の胸に突き刺さりました。歴史家の磯田道史さん著、「家康の誤算」です。江戸時代約260年終焉の原因は？……「制度疲労」です。世界情勢の変化に日本はかたくなに背を向け続け、自国民の今後に憂いをもつことなく「自らの変化」を潔く決断する時期を逸した結果です。

私は今の教育行政はまさにこれと一致しているような気がいたします。

現教育システムの発祥は、明治維新时期、西洋へいち早く追いつくことを念頭に土台が出来上がっています。その土台とは、一律の人材を育成することでした。工場制手工業（富岡製糸工場等）を発展させるためには、そこで働く従業員たちは、一つの命令に対し画一した行動を求められました。みんなちがってみんな良くなかったのです。維新时期、並行して教師不足でもあったため、一教室に多くの子どもたちを迎え入れての授業を強いられました。さらに一回の授業ですべての子どもたちが同様の知識を得られるよう「強制」の力がはたらきました。それから約80年、終戦、新しい日本国憲法のもと教育はどうなったのか、やはり急速な国家復興を目的に子どもたちには「労働力創出」としての教育が色濃く注がれました。今でも理科の実験や技術家庭科などがその例で残っています。

中央教育審議会（中教審）では、主にこれからの教育を占うべく「教科書」（指導要領）が審議されます。そのメンバーを文科省では公開しています。結構実業家の方々が名を連ねています。つまり、今後の日本経済を占うべく子どもたちをどのように育成していくべきかを論ずる主導権が委任されているのです。それを裏付ける著書があります。小国喜弘さん著「戦後教育史」です。「戦前の学校教育が、強い兵士を軍隊に供給することであったのが、戦後は優秀な労働者を産業界に供給することへと変わった。」と論じています。驚くべきことは、財界が行った学校教育についての最初の要望が中教審の設置だったということです。それ以後、中教審は「指導要領の歴史」を綴り続けているのです。

最近聞いたNHKラジオでは「じっくり語ろう日本の未来」と題し、これからの教育について興味あるお話がありました。霊長類学者・人類学者 山極壽一（やまぎわじゅいち）さん、東京大学大学院教育学研究科教授 本田由紀さんのお二人です。山極さんは冒頭、「今の教育はビジネス化している。競争主義によって大きな成果を出し、毎年のように右肩上がりにしていくことが企業の常識である中、同じように子どもたちを競争させ、その成果を数値に置き換え、その中でよいところを親たちが選択していく。これは教育の現場にそぐわない。また、本田さんは、「今の教育は『垂直的序列化』→（成績・順位等）、『水平的画一化』→（同学年同一内容の教育）が子どもたちの苦しみの背景にある。」とおっしゃっていました。

ここから現行教育制度の中に子どもたちが苦しんでしまう大きな要因が含まれていることがわかります。

私は現行教育制度の改革こそが子どもたちを救うためには必要であると思っています。

そのひとつ目が「テストの廃止」です。小学校入学後、徐々に子どもたちはテストの恐怖心に覆われていきます。そこから生まれた感情が「どうしよう」です。かなりの割合で存在すると思っています。テストから生まれる大きな犯罪が「選択問題」です。「次から選りなさい」という問いの時、わからなければ選択できないはずなのですが、これをお読

みになっている方々はすべて（１００％）選択してきました。「ひょっとすると合っているかもしれない」です。「点数は高い方が良い」というテストから生まれた常識がそうさせます。本来の学びは、「そうだったんだ、わかったぞ!」という喜びの気持ちを増幅させてあげることであり、さらに学びたいという意欲を作ってあげることだと思います。さらに先へ、もっと先へ自らのところが働きだすことを促すお手伝いをするのが教育に携わる者の務めだと思います。しかし現実には１００点主義、合っていればよいのです。合格すればよいのです。

ただし、テスト廃止は小学校１年生のスタート時からでないとも効果は表れません。テストの意味を「１００点主義」と解釈した子どもたちはテストのために勉強があるのだと思うようになり、テストを廃止するや否や全く勉強はしなくなります。「勉強はテストのためにある」という誰も教えてはいないルールを自然に身につけます。

テストをしない学校があります。自由の森学園です。埼玉県飯能市にあります。ここでは「点数で序列化せず、一人ひとりの生徒に対して、授業を担当する教師が文章で記述する方法をとります。」と、あります。（当該HPより）

テストのない環境は不登校対策のひとつの手段だと思います。

次に不登校が急激に増加している要因に「真似をする」という心理です。私は「学校へ行きたくない」と思っている子どもたちはかなりの割合で存在していると思っています。子どもたちは小学校入学後、徐々に先生のお話を聞かなくなる子が増えていきます。なぜならお話を聞かなくても学校生活が出来てしまうケースが増えていくことが原因になります。子どもたちの毎日の「ものさし」は、「叱られなければいい」です。物事の良し悪しの基準は「叱られるか」「褒められるか」で決定されがちです。特に「叱られる」については記憶に残りがちなので、事が起こった以降気をつけるようになりますが、「叱られない」については、それが犯罪行為になっても、子どもたちの中では「スルー」な行為と認識されがちです。その最たるものが「いじめ」になります。周りが皆、同じことをしていれば「悪いことではないらしい」という判断が自らに宿り、同様の行為を始めがちになります。これと同じような心理が「不登校」の心理にもあるものと思っています。「あの子も」「あの子もだ」と、１人、２人、３人・・・と、増え始めると、「私も行かなくていいかもしれない」というミラーリングが芽生え、連鎖します。それも要因のひとつだと考えます。ミラーリングはいたるところで見受けられます。都内小学校の中学受験熱や地方の若者たちの都会信仰など。

保護者の感覚変化も要因のひとつだと考えられます。学校へ行けない子に対する感情が以前とは変化していると思います。昭和期の保護者であれば、「学校へ行きたくない」と、子どもが訴えればどのような行動をとったでしょう。今や平成を飛び越え令和になり、同様に「行きたくない」と子が叫んだら、子に同情的な保護者の方が多いかもしれません。それも周りの方々の動向を察してのこと（ミラーリング）かもしれないのです。「周りに合わせる」という行為は結構日本人の個性なのかもしれません。

その最上位に君臨するのが「学歴社会」です。相変わらず学歴は人生成功への最有力、最短チケットとして保護者の方々に根付いているようです。垂直的序列を当然とし、水平的画一化から生まれる格差を極度に気かけながら、わが子に接しているのが現実ではないのでしょうか。そこには必ず「感情」が発生しがちです。垂直的な数値によって保護者の感情は敏感に反応いたします。まずは現行教育制度が疲労していることを認識されることです。先に掲げました文科省の「特例制度」では、解決の道筋はまだまだ遠くにあるように思います。学校へ行きたくないという子どもたちは、行かなければ「不登校」という形で現れますが、「行きたくないけれどお父さん、お母さんを苦しめるわけにはいかない」という思いやりを抱えながら学校に通う子どものほうがはるかに多いのではないのでしょうか。

テストなし。序列化なし。画一化した授業を減らす。その子の瞳（こころ）の動きに添った学びを提供してあげる。助け合うことができる学校。隣の子が微笑んでくれるような毎日を送ることができる学校、先生に何でも質問できる学校。

現場で日夜「子どもたちのために」と、激務に励んでいらっしゃる先生方の「声」が最も強く中教審に届かなければならないはずです。子どもたちの苦しみを肌で直接感じ取っていらっしゃるのは現場の先生方なのです。子どもたちにとっての一番の味方は先生方です。日本経済の発展を最優先にしがちな方々とは理念がそもそも違っています。教科書も授業も、理想は現場で働く先生方の「想い」を最も尊重しなければならないはずです。

文部科学省は今の子どもたちの現状（苦しみ）をもっと俯瞰視するべきです。教育と経済は本来別々にあるべきものと考えます。なぜなら、教育は「ひと」づくり、「こころ」づくりだからです。経済は「お金」づくりです。

昨今の人口減少の要因のひとつにも、今の教育制度が色濃く影響しているのではないのでしょうか。今の若い方々が結婚され家族を考えた時、わが子が成長するにつれ、やがて「受験」という戦いの中でもがき苦しむ姿を自らの経験から想像されるかもしれません。その時、果たして「我が子のしあわせ」を繋げることができるのでしょうか。そして自身の受験、進学がご両親のご苦労の紡ぎの上に成り立っていることを想像されると思います。第２子、３子を「家族のしあわせ」という語彙の中に同居させることははたして簡単なことなのでしょうか。

今の若い方々が育ってこられたその道のりが、今の少子化に少なからずかわっているのではないかと思います。少子化の解決には、文科省自らが現場教員たちの声を反映した制度改革「自らの変化」へと大きくかじを取ることが必要だと思います。どうか文科省さん、時代に乗り遅れないでください。

ばくは、わたしは、こんなに素敵な学校時代を過ごしてきた、だから我が子たちにも同じ思いを・・・。

そんな学校、つくりましょう！